

琉球大学学術リポジトリ

東北タイにおける出稼ぎ労働者－ウドンタニ県クン
パワピー郡パンドン村を事例として－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 規之, Suzuki, Noriyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13290

東北タイにおける出稼ぎ労働者

—ウドンタニ県クンパワピー郡パンドーン村を事例として—

鈴木規之

はじめに

ウドンタニ県クンパワピー郡パンドーン村は、県都のウドンタニ市よりほぼ40kmの農村で、かつてはバンコクへの出稼ぎに依存していたが、1970年代半ばより中東を中心とした外国への出稼ぎに依存するようになり、社会構造が大きく変化している。また1990年代に入ると、日本への出稼ぎ者が急激に増加し始めた。¹⁾

本稿では、出稼ぎの背景となったパンドーン村の状況について論じた後、村を大きく変えた中東への出稼ぎについてその概要を論じ、最後にパンドーン村のデータより出稼ぎが主たる要因となった社会変動のプロセスおよびそれがもたらす様々な影響について論じたい。

なお、調査は1984年9月と1989年10月に実施し、その後1991年6月に補足のインタビューを行っている。²⁾

注)

- 1) ウドンタニ県は、1993年に西部のノンブアラムプー市を新たな県都とするノンブアラムプー県が分離し、面積、人口ともほぼ半分になった。本稿では、分離以前のデータを使用している。
- 2) この調査の詳細は、鈴木規之『タイ農村の社会変動とオルターナティブな発展』筑波大学社会科学部研究科博士論文、1992年、第3章を参照のこと。本稿は、この第3章の一部を大幅に加筆修正したものである。

第1章 調査地の概況

東北タイの大部分は、地味の悪い土壌と頻繁に起こる干害のために農業の生産性は極めて低い。そのうえ、1年の半分を占める乾期は農業が不適であるため、1930年代よりバンコクへの出稼ぎが開始された。1960年代に入ると、ベトナム戦争を契機とした道路網の整備のため、バンコクへの出稼ぎが急増したのである。

この地域は、農業が不振のうえに産業化が遅れ、所得も他の地域と比較してかなりの格差があるため¹⁾、これまで多くの反体制勢力を生み、1976年に学生革命による政府が崩壊した後も、多くの闘士たちがこの地に逃れた。また、ここはラオス、カンボジアにも近く、共産主義の勢力も影響力を持っていた。そこで、政府は危機を感じ、国王のプロジェクトとして「緑のイサーン計画」などを発足させ、内務省主導のもとで（軍・警察の大きな肩入れもあり）重点的に開発プロジェクトを実施しているが、この格差を解消させる成果を上げるまでには至っていない。

このような東北タイにもN I C S化の流れは押しよせ、またそれを是とする政府の開発政策は、都市と農村、また農村の中でも機会に恵まれた農民とそうでない農民の格差を拡大しつつある。この格差を拡大する最大の要因となっているのが実は出稼ぎなのである。一方、このような政府主導での開発を是とせず、農民やNGOを主体とした草の根レベルでの開発プロジェクトも東北タイには数多く存在するが、あくまで部分的なものでしかないのが現状である。²⁾

ウドンタニ県は、バンコクから550キロ、バスで約9時間のところにあり、1990年現在の人口が約179万人、ウドンタニ市の人口は9万人である。³⁾ベトナム戦争当時はアメリカ軍が駐留し、大きな社会変動が生じた経験を持つ。アメリカ兵向けのディスコ、バー、ナイトクラブが賑わいを見せ、また女性たちによる売買春行為も横行していたのであった。アメリカ軍撤退後は賑わいも消え失

せ、タイ人や数少ない旅行者向けに衣替えした一部の店が残っているのみである。

ウドンタニはまた、ラオスへの拠点であるメコン川岸のノンカイまで50キロで、ラオスが社会主義化する1975年まではラオスへの拠点としての重要な地位を担っていた。1994年にオーストラリアの援助によってタイ・ラオス友好橋が完成し、拠点としての地位が復活しはじめているが、その間の約20年間は経済的にも停滞し、イサーン（東北タイ）北部の中心の地位もコーンケーンに奪われたのであった。

このような停滞の中で、ウドンタニは海外への出稼ぎへの中心地としてタイ国内でも著名となっていった。タイ国内では第1位である。⁴⁾当初は、ベトナム戦争の終結によるアメリカ軍の基地従業員の失業対策として開始されたが、国会議員であるプラチュアアップ・チャイヤサーン氏（現農業大臣）を中心に海外への出稼ぎ者を送り出す会社（マンパワーとよばれる）が次々と設立され一気に増加した。一方、県の労働局も出稼ぎの斡旋には熱心で、労働局には海外出稼ぎを希望する人々が押しかけている。公式の資料によれば、1988年には10,600人がウドンタニ県から出稼ぎに出たと記されているが、実際にはその数倍と推定されている。⁵⁾なお、ウドンタニの就業構造は、米（モチ米が多い）、キャッサバ、ケナフ、さとうきび、メイズなど農業が中心であり、工業、建築業は少なくなっている。

クンパワピー郡は、ウドンタニ市の南東に位置し、中心であるドンムアンは、ウドンタニ市の中心部から40キロの距離がある。クンパワピー郡の人口は、1990年現在で138,124人となっている。⁶⁾

クンパワピー郡の中心の産業は、やはり農業であり、特色としてはさとうきびの栽培が26.1%とウドンタニ県全体の4.8%に比べて多いことである。そしてクンパワピー郡の農民は、ウドンタニ県の農民の中では豊かな方である。ウドンタニ県の農村部全体と、クンパワピー郡の農村部の世帯当たりの収入を比

較すると、ウドンタニ県全体では、年収2万バーツ以上の農家は7.8%、6千バーツ以下の農家は50.1%であるが、クンパワピー郡では、それぞれ12.6%、35.6%である。⁷⁾しかし、一部の裕福な農家を除き、彼らの生活は決して楽なものではない。

クンパワピー郡からも、多数の中東への出稼ぎ者を送出している。郡役場の調べでは、中東への出稼ぎは1975年から始まり、1983年には1,030人に達している。そして、1983年から1985年頃までが、そのピークであった。この1,030人という数字は、県の労働局を通じて出稼ぎに行った数であり、実際はこの約2倍に達していると推計される。たとえば、パンドーン村では、郡役場の調べ（すなわち県の労働局を通じて出稼ぎに行った数）は125人であるが、村長（カムナン）の調べでは、実際は292人であったことが判明している。中東以外では、数十人程度が1983年の時点ではシンガポール、カナダなどに出稼ぎに行っている。⁸⁾

調査村であるパンドーン村は、クンパワピー郡の中西部に位置する。中央部を南北に国道2号線および鉄道が貫き、クンパワピー郡の中心であるドンムアンとウドンタニを結ぶ結節点となっている。人口は1989年現在で17,299人、2,736世帯より成る。⁹⁾パンドーン村は、16の区（ムバーン）によって構成され、それぞれの区は、百数十世帯からなる集落となっている。

パンドーン村の中心は、村長（カムナン）のオフィスがあり、また大きな市場のある15区である。15区からドンムアンまでは約6キロの距離があるが、頻発するシーローで簡単に行くことができる。小学校は10校あり、子供たちにとっては至近距離であるが、中・高等学校はなくドンムアンまで通学しなければならない。村の中央部に位置する4区には、バンコク方面へのバスの発着場があり、小さな市場が形成されている。村の中心部は国道以東にあり、区も東部に偏在しているのである。

区が東部に偏在する要因は、パンドーン村の地形である。パンドーン村西部

からとなりのノンセーン小郡にかけては丘陵地帯となっているのに対して、東部は低地となっており小川や池が多い。したがって、土地利用の点でも大きな差があり、中部から東部にかけては稲作が主に行われ、西部の丘陵地帯ではさとうきび、キャッサバ、ユーカリなどの栽培が行われている。

パンドン村の農地利用は、87.7%が米であり、以下さとうきび5.2%、キャッサバ1.3%などとなっており、低地が多く米の栽培が多いこと、丘陵地帯の農地としての開発が遅れていることが理解される。¹⁰⁾

前述のプラチュアップ氏はパンドン村の出身で、クンパワピー郡にもマンパワーの会社を設立し、パンドン村からも中東への出稼ぎの希望者が殺到した。この出稼ぎ労働の実態については、第3章で詳述することにしよう。

注)

- 1) 1989年の1人当りのGDPは、8,124バーツで、タイ全体の1人当りGDP (20,236バーツ)の43%である。1975年はタイ全体の45%であり、格差は拡大の傾向にある。
Seri Phongphit (et al.), Thai Village Life-Culture and Transition in the North-east, Bangkok, 1990, p. vii.
- 2) たとえば、Seri Phongphit, Religion in a Changing Society - Buddhism, reform and the role of monks in community development in Thailand, Arena Press, Hongkong, 1988. に東北タイの農村で僧と農民が協力している関係プロジェクトの事例がある。
また、Praveat Vasri, Bhuddha kasetrakam kab santisuk khong sangkhomthai, Bangkok, 1987. にも東北タイにおける農民の自助努力の事例がある。
- 3) Banyai sarup changwat Udonthani, Samnakan Changwat Udonthani, 1990, p. 17.
- 4) Kanok Tosurat, Preecha Uyatrakoon, Pholkratop pairang kan dern thag krab chak tamgan nai tawanookklang khong reangan thai, Samakhom sangkomsat heang prathet Thai, 1989, p. 2.
- 5) 1987年には、10億4,640万バーツの送金がウドンクニ県にもたらされたと推計されている。また、1988年の上半期(1月-6月)には、4億686万バーツが送金されて

いる。 Banyai sarup changwat Udonthani, pp. 37-38.

なお、中東への出稼ぎの場合は、労働局を通す場合と出稼ぎ斡旋会社（マンパワー）を通す場合とがある。しかし、後述する日本への出稼ぎの場合は資格外就労となるため労働局も出稼ぎ斡旋会社が業務を行なうことを認可せず、すべて個人の斡旋業者（ブローカー）を通して行なわれている。

6) 3) に同じ。

7) 5) に同じ。

8) 中東への出稼ぎ者のほとんどが男性であるが、メイドやハウスキーパーなど女性の中東への出稼ぎ者も見られるようになった。バンドーン村でも第2区では女性の中東への出稼ぎ者は見られないが、他の地区では数人の女性が中東への出稼ぎ経験を持っている。

9) 郡役場調べ。

10) 郡農業オフィス調べ。

第2章 中東諸国への出稼ぎ

ここでは、調査地であるウドンタニ県クンパワピー郡バンドーン村の変動の大きな要因となった中東諸国への出稼ぎについてその概要を論じる。1975年より本格的に開始された中東への出稼ぎは、1980-1985年前後にピークを迎えた。その後、原油の価格の低下や湾岸戦争などで一時の熱狂的ブームは去ったが、現在でも依然として重要な出稼ぎ先となっている。ここでは1980年前後のピークの際の状況を中心に論じ、村落にもたらした影響について考察したい。

① その概要

東北タイにおける農村の社会変動、特にウドンタニ県を事例にするにあたっては、海外への出稼ぎ、特に中東への出稼ぎを無視することはできない。この

中東への出稼ぎは、タイ国内での失業問題に光を与えるだけでなく、労働力の輸出という意味で国際収支の赤字をも減少させることができ、また、農村の過剰人口を中東に送出すれば、一極集中都市としてのバンコクの肥大化を食い止め、同時に農村の貧困問題も緩和することができると考えられ、国家経済社会開発庁の第五次経済社会開発5か年計画(1982年-1986年)でも奨励されている。¹⁾

この政策には、出稼ぎの斡旋業者の育成や送金システムの確立、賃金の公正な分配のための制度の確立などが盛り込まれている。以上のような政府の奨励のもとで、タイ国民は中東への出稼ぎを熱望するようになった。出稼ぎ者の多くが、タイ国内では望めないような高い賃金を得て帰国するようになったからである。このように、タイ国内に大きなインパクトを与えた中東への出稼ぎは、いかなる契機で開始されたのであろうか。

タイ経済は一貫して世界経済システムの中で従属的地位にあったが、このような状況のもとでタイは第2次世界大戦以降二度にわたる経済危機を経験してきた。第2次世界大戦直後の経済危機は、農作物の積極的な輸出によって切り抜けてきたが、1973年以降のオイル・ショックによる経済危機は、タイのような石油を産出しない第三世界の諸国に多額の貿易赤字と累積債務をもたらした。1980年以降になっても石油に支払われる代金は輸入額の約3割にもおよび、タイ経済を圧迫した。このような経済状況のもとで、タイでは失業および半失業の状態にある過剰人口がバンコクへと大量に移動し、大きな問題を生じさせたのである。

これに対して、中東諸国はオイルダラーを利用して国家建設を計画していたが、もともと人口の希薄な地域であるため、国家建設に必要な労働力が決定的に不足していた。そこで、莫大な外貨を用いて、技術者を先進国から、労働者を余剰労働力を持つアジア諸国から導入することになった。

出稼ぎ者の送出は、民間の斡旋業者および政府を通して行われる。1980年当

時、約95%が民間の斡旋業者を通しており、政府によるものは5%にすぎない。斡旋業者の数は230にもものぼり、中には認可を受けていないものも多数存在する。²⁾これらの斡旋業者は、中東での仕事の確保、中東での生活の世話、中東へ行く前の職業訓練、パスポートや査証の申請の代行などを行うが、彼らに支払われる仲介料（コミッション）の額は1人当たり2万-3万バーツにもおおよび、その総額は莫大なものである。

タイから中東への出稼ぎが本格的に開始されたのは1975年であった。1975年には984人にすぎなかった出稼ぎ者は、途中減少した年もあるが傾向としては増加の一途をたどり、1981年には24,472人に達した。しかし、この数字は斡旋業者や政府を通して労働局に登録された出稼ぎ者のみの数字であり、実際の出稼ぎ者の数はこの数字をはるかに上回る16万人ほどと推計されている（労働局調べ）。登録された出稼ぎ者では、1981年には、リビア（10,189人）とサウジアラビア（9,806人）の両国が多く全体の80%を占め、以下イラク（1,979人）、カタール（1,538人）、クウェート（608人）、バーレーン（388人）となっている。一方、推計では、サウジアラビアが10万人と過半数を占め、以下イラク（2万人）、リビア（2万人）、クウェート（5千人）、バーレーン（5千人）、カタール（3千人）、アラブ首長国連邦（3千人）となっている。また、バンコク銀行の1988年の発表では、1986年には312,900人、1987年には301,300人が外国に残留しており、中東が228,000人（サウジアラビア15万人、リビア2万8千人、イラク2万5千人、クウェート7千人、バーレーン5千人、アラブ首長国連邦とカタール4千人など）、シンガポール3万1千人、マレーシア2万6千人、ブルネイ6千人、日本5千人、ホンコン2千5百人などとなっている。³⁾

タイからの初期の出稼ぎ先は、バーレーン、サウジアラビアであったが、1978年以降になると新たにいくつかの中東諸国が出稼ぎ先として登場してきた。そして、1980年以降はサウジアラビアが最も重要な出稼ぎ先となっており、以下、イラク、リビア、クウェート、バーレーンなども重要な出稼ぎ先となっている。

中東へ出稼ぎ者を送り出している国としては、タイ以外に韓国、フィリピン、バングラディシュ、パキスタン、インド、スリランカなどがあり、高い技術を持つ韓国以外は、タイからの出稼ぎ労働者と競合関係にあり、中東での仕事の奪い合いが行われている。

② 出稼ぎ者の特徴

中東へ出稼ぎ者の特徴については、国家経済社会開発庁が1981年に561人の中東へ出稼ぎ経験者に調査を行い、それに基づいたピーラテープの分析がある。⁴⁾

(1) 男性の出稼ぎ者が95%以上である。

中東諸国はイスラム教を信仰しているため、家事労働以外の女性の労者は歓迎されない。そのため、建設労働者や工場労働者としては女性は採用されない。東南アジアからは、家事労働やドレス・メーキングなどで女性の就業の希望が多いのであるが、パキスタンやフィリピンのイスラム教徒を除いては採用はごくわずかである。したがって、タイからの出稼ぎ者の95%以上が男性となっている。⁵⁾ タイ女性の採用が少ない副次的な要因としては、出稼ぎ先でしばしば売春を行うこともあげられる。

(2) 東北タイ出身者が多い。

労働局によれば、1981年の中東へ出稼ぎ者の地域別構成は、東北部39.5%、中部38.0%、北部22.0%、南部0.5%となっている。⁶⁾ そして、バンコクからの出稼ぎ者は14.9%となっている。しかし、バンコクからの出稼ぎ者の多くが、バンコク生まれではなく、東北部からの移動者がかなり存在するため、実際は中東へ出稼ぎ者のかなりの部分が東北タイの出身者と推計される。また、県別のデータでは、本稿の調査対象である東北タイのウドンタニ県が20.1%を占め、以下バンコク首都圏(中部) 14.9%、ランパーン(北

部) 6.6%、ナコンラーチャシマー（東北部）5.5%、チョンブリー（中部）3.5%、その他43.4%となっている。⁷⁾ この中では、特にウドンタニ県の割合の大きさに注目すべきである。ウドンタニ県の人口は、バンコク首都圏の3分の1以下であるから、県民の中東への出稼ぎ者の割合は、非常に高くなっているのである。

(3) 26-35歳の年齢層に集中

1981年の中東への出稼ぎ者の平均年齢は31.9歳、5歳ごとの年齢階層を設けると、26-30歳の層が27.6%と最も多く、そして26-35歳とあわせて全体の半数を占めている。⁸⁾ 20歳以下および50歳以上は原則として採用されないことになっており、最も働き盛りの層に出稼ぎ者が集中している。

(4) 低い教育程度

出稼ぎ者の83.2%が4年以下の教育、すなわち小学校以下の教育を受けたにすぎず、簡単な英語の知識もほとんどない。9年以下、すなわち中学校レベルの教育を受けた出稼ぎ者は14.4%、そして職業学校（専門学校）は2.0%、大学教育0.4%と非常に少ない。⁹⁾

(5) 既婚者が多く、扶養家族数が多い

出稼ぎ者の89.8%は既婚者であり、独身者はわずか10.2%にすぎない。また、既婚者、独身者を含めての、出稼ぎ者の平均家族数は5.86人であり、この中の3.65人は就業していない。したがって、出稼ぎ者は、多くの扶養家族を抱えていることになる。¹⁰⁾

(6) 仏教徒である

98.8%は仏教徒であり、キリスト教徒、イスラム教徒は1.2%を占めるにすぎない。¹¹⁾ タイにも南部を中心に人口の5%ほどのイスラム教徒が存在するが、特に中東への出稼ぎに関心を示すということはない。

(7) 建築関係の仕事の経験者が多い

中東に出稼ぎに行く以前の職業は、農業が21.9%と最も多く、以下雇用労

働者12.5%、建築労働者11.8%、運転手10.3%、大工10.0%、商業8.2%、機械工・技手3.0%、その他22.3%となっている。¹²⁾ 農業の占める割合が最も大きい、75%を農民が占めるタイ全体の就業構造を考慮にいれば、この割合はむしろ少ないと考えるべきである。そして、建築関係の仕事の経験者の多さが目だっている。しかし、出稼ぎ者の多くは農村に居住していることから、農村における雑業者層としての建築労働者が、最も典型的な中東への出稼ぎ者になっているといえることができる。

(8) 熟練工が多い

出稼ぎ者の中で、熟練工および半熟練工の占める割合は69.6%にもおよび、非熟練工の割合30.4%の2倍以上に達している。¹³⁾

(9) 低所得者が多い

移動者の出稼ぎ以前の平均年収は、27,012バーツである。6千バーツごとの層を設けると、6千バーツ未満21.2%、1万2千バーツ未満10.3%、1万8千バーツ未満13.4%、2万4千バーツ未満13.5%、3万バーツ未満9.3%、3万6千バーツ未満11.6%、4万2千バーツ未満5.0%、4万8千バーツ未満4.3%、5万4千バーツ未満1.8%、5万4千バーツ以上9.6%となっている。¹⁴⁾

以上のような特徴をピーラテープはあげているが、この分析のうち、(4)低い教育程度、(9)低所得者が多い、の2つは明らかに問題である。データでの検証は次章に譲るが、たとえば(9)の出稼ぎ前の平均年収について一考すると、この額は1980年当時のものとはいえ、バンコクの水準からみれば、ピーラテープのいうように低所得者であるといえるが、東北タイ、それも農村ではそこそこの収入であり、農村からみれば高所得者が多いといえる。また、農村での高所得者層となれば、学歴も農村においては相対的に高い。したがって、このことを考慮に入れてピーラテープの分析から中東への出稼ぎ者の像を描写すれば、東北タイ出身の農村に住む30才前後の働き盛りの男性で、何らかの技

術（たとえ半熟練レベルでも）を持ち、家族の生活をよりよくするために中東での出稼ぎに就く。しかし、本当に貧困なわけではなく出稼ぎに必要なコミッションを何らかの形で払える人であるということができよう。

③ 出稼ぎによる影響

中東への出稼ぎは、タイ国内に様々な影響を与えた。一般的には、収入による経済的効果が強調される。

中東への出稼ぎからの収入は、基本的には送金という形でタイ国内にもたらされる。送金の額は、年間1人平均102,928バーツにもなり、中東での収入全体の70%に及んでいる。¹⁵⁾ タイの代表的銀行であるバンコク銀行が扱った送金額は、1981年には約70億バーツとなっている。バンコク銀行は、全体の70%強の送金額を扱っており、他の銀行が扱った送金額との合計は、100億バーツと推計される。¹⁶⁾ このような莫大な額の送金は、結果として外貨の獲得を意味する。また、16万人におよぶ中東への出稼ぎは、タイ国内における失業問題の部分的な救済にもなっている。中東への出稼ぎ者の多くは、農村における過剰人口であり、中東への出稼ぎは、そのまま雇用機会の増加を意味するのである。さらに細かい点では、出稼ぎ者の分は、タイ国内での消費および賃金が節約されること、労働者のための中東諸国への輸出、特に食料の輸出が増加すること、出稼ぎ労働者が中東において技術を獲得できること、パスポート発行の手数料や航空運賃収入、税金などで政府の収入が増加することなどがある。

経済的には、送金は農村においても肯定的な影響を与えた。農村においては雇用機会が十分でなく、これまではバンコクへの出稼ぎにたよっていたが、収入の面では決して満足できるものではなかった。それが、中東への出稼ぎではこれまでに考えることのできなかつたような桁違いの収入をもたらしたのである。多くの出稼ぎ者は、出稼ぎ先での収入が出稼ぎに要した費用およびタイ国

内での収入を大きく上回り、残された家族、帰国後の生活の向上を達成している。国家経済社会開発庁の調査によれば、1981年の中東での平均の月収は12,533バーツ（基本給8,522バーツ、時間外手当3,742バーツなど）となっている。職種による差も当然あり、単純労働・守衛の7千バーツ程度から、大工・運転手・機械工などの1万3千バーツ、機械技手・職工長の1万7千バーツまでとなっている。ところで、出稼ぎ者の平均月収を12倍して得られる平均年収は150,636バーツとなり、この額は、出稼ぎ以前の平均年収27,012バーツの5倍以上になっている。¹⁷⁾ 出稼ぎによる収入の増加は、教育の振興には効果的であった。それまでは義務教育ですら精一杯であったものが、最近では中等教育およびそれ以上の教育を受けさせることができるようになり、学校の施設改善のための寄付も集まるようになった。学校への寄付と同様、寺への寄進も増加し、寺の施設の改善にも寄与している。学校や寺だけではなく、出稼ぎ者の家屋もかなり改善された。

出稼ぎによる収入の増加は、ある意味では出稼ぎ者の世帯に生活の向上をもたらしたことも確かである。スマリー・ピタヤノンは、出稼ぎ者の世帯の支出を分析し、肉・乳製品・飲料といったある程度贅沢と考えられる品目の支出や、衣服・教育・レクリエーションなどの消費がかなり増加していることから、生活の向上を結論づけている。¹⁸⁾ また、数としては少ないが、収入を消費のためだけに用いるのではなく、預金や様々の投資に用いている例がある。投資の内訳は、農地、農業機械の購入や農地の改良など農業に関するものや、新たな商売への投資、たとえば店を開くことや農村の交通機関であるソンテーオ（オートバイの後部に座席をつけたタクシー）の運転を始めることなどがある。

このような経済的効果による肯定的側面が一般には強調されるが、一方では否定的な側面も当然指摘されている。スマリーは以下のようにタイ全体の問題と村レベルの問題があると論じている。

まず、タイ全体に関する問題としては、「ゆるやかな社会規範」に基づくタ

イ人の行動が、イスラムに基づく社会規範を持つ中東諸国においてしばしば問題を起し、国家の威信まで傷つける場合があること、出稼ぎ者の不在による農業生産の低下¹⁹⁾ および熟練工の不足、また社会問題の発生などである。

次に、村レベルの問題としては出稼ぎ者の贅沢品購入による村の人々への影響がある。中東において高収入を得られた出稼ぎ者は、帰国時または帰国後に多くの耐久消費財を購入する。帰国時には、ステレオセットやカメラ、高級ウイスキーを携行し、帰国後にはテレビ、冷蔵庫、オートバイなどの耐久消費財を購入している。スマリー・ピタヤノンらの調査によれば、中東での収入の多くがこのような贅沢品の購入に当てられているのである。²⁰⁾ 新しい住居を建築したり、自動車を購入する場合もある。このことは、人々の羨望のまなざしを誘い、新たな出稼ぎ者を誘発するばかりでなく、近隣関係や親戚関係の不和の原因にもなっている。また、中東からの賃金は出稼ぎ者のいる農村の物価を確実に上昇させている。特に、需要が急速に増加した建設資材、電機製品の価格が上昇している。帰国後農地の購入を希望するものもあり、需給のバランスがくずれて農地価格が大幅に上昇した例もある。²¹⁾ 物価の上昇にしたがい、農村における賃金も確実に上昇している。

さらに、出稼ぎの失敗による悲劇がある。高収入を得るための中東への出稼ぎは、自己負担なしに行くことはできない。1981年でコミッションは1人平均20,498バーツとなっている。その中で最も大きな割合を占めるものが、仕事を取るための委託料である。この中には、ワーキング・ビザの代金が含まれ、この額は賃金とは逆に、希望者が多く競争の激しい単純労働などでは高く、競争の少ない職工長や機械技手では低くなっている。また、コミッションには、しばしば前借りの利息が加算される。利息を加算したコミッションの総額は25,954バーツとなり、利率の平均は月9.3%とかなりの高率である。²²⁾ 多額のコミッションを支払い、中東に行ったにもかかわらず、仕事に恵まれない、期待したほどの収入が得られないという場合があり、ひどい場合には中東へすら

行けないこともあり、さらには中東でかなりの額を消費してしまう場合もあるのである。²³⁾ しかも、ほとんどの場合、借金によってコミッションを調達したり、給料の前借りをしているため、期待した収入が得られなければ負債が残ることになる。借金の利息は月10%前後と非常に高利な上、土地や家屋を抵当に入れなければならない。収入を得ることに失敗した出稼ぎ者には、土地、家屋などの喪失や破産が待ち受けているのである。そのため、自殺や仲介業者への復讐などの事件が頻発するようになった。また、出稼ぎ者およびその家族にとって、中東という外地での就労はかなりの精神的苦痛を伴う。出稼ぎ者自身は厳しい砂漠気候、飲酒、ギャンブル、売春などが厳しく禁じられているイスラム社会の生活習慣にも適応しなければならない。これに対して、妻の側も強い孤独感にさいなまれ、浮気や家出などをしてしまうケースも少なくない。夫が中東から帰ってみると妻がいない、家庭が崩壊していたなどといった悲劇があちこちで起きている。

以上、出稼ぎの影響について一般論をとりあげてみたが、結局のところ論じられているのは出稼ぎによるメリット（肯定的側面）とデメリット（否定的側面）である。肯定的側面とは出稼ぎによる莫大な収入であり、出稼ぎ収入によって人々の生活水準は確実に上昇する方向に向かうために、とりわけ近代化論者によって強調される。また否定的側面は、これを得るためにさまざまな問題が生じ、またこの莫大な収入がその後新たな問題を生じさせてしまうことであり、こちらを強調する論者も存在する。しかし、メリット、デメリットの議論からは人々の心の側面が欠落している。特に出稼ぎによって得られる莫大な収入が人々の欲望をかきたて、農業がそして、人々の連帯が崩壊するような方向に進んでいくことは見逃すことができない。また、近年では日本への出稼ぎに対する関心が出始め、状況はさらに深刻化しつつある。²⁴⁾ これについては次章で具体的な調査例から詳述することにしよう。

注)

- 1) National Economic and Social Development Board, The Fifth National Five - Year Economic and Social Development Plan 1982 - 1986.
- 2) Peerathep Roongshivin, Some Aspect of Socio-Economic Impacts of Thailand's Emigration to the Middle East. Asian Australia Population Project: Institutional Development and Exchange of Personnel, 1982, p. 5.
- 3) 鷺尾宏明「タイをめぐる国際労働移動」『アジ研ニュース』№105、1989年。
しかし、1990年代に入ってバンコク在住のサウジアラビア外交官の殺害によるタイ人労働者へのビザ発給の停止、湾岸戦争の発生などで、中東への出稼ぎ労働者の数は激減した。労働局の発表では、1989年には61,402のサウジアラビアへの出稼ぎ者がいたが、1990年には9,970人、1991年には5,613人となっている。データは以下の文献による。
Chaiskran Hiranpruk "An Overview of Emigrant Workers to Japan in Developing Countries", Hiroshi Komai (ed.) Overview of Emigrant Workers to Japan in Developing Countries. University of Tsukuba, 1993.
- 4) 2) に同じ。
- 5) Peerathep, p. 8.
- 6) 労働局調べ。
- 7) 労働局調べ。
- 8) 労働局調べ。
- 9) 1981年のNESDBのWage and Employment Planning Sectorの調査による。
- 10) 9) に同じ。
- 11) Peerathep, p. 10.
- 12) 9) に同じ。
- 13) Peerathep, p. 11. なお、日本ではどちらも単純労働者となり、就労は資格外となる。
- 14) 9) に同じ。
- 15) Peerathep, p. 12.
- 16) Peerathep, p. 12.
- 17) 9) に同じ。
- 18) Sumalee Pitayanond (et al), Thai Overseas Employment Short-run Contracts' Economic Impacts on Families and Communities : A Case Study in Northeastern Villeges. Faculty of Economics, Chulalongkorn University,

1982, p. 35 - 36.

- 19) ホンファー・セーントナーブルックの調査によれば、農業の中心的な担い手が出稼ぎに出てしまうために、放置される農地が多く、農業の生産性が明らかに低下するという事実も示している。

Hongfa Saengthanapluk, "Pholkrahop khong kan pai thamgan tang prathet to chumchon chonnabot:krani suksa mooban nai changawat Udonthani" Saethasat Thammasat, vol. 7-2, 1989.

20) Sumalee, p. 31.

21) Sumalee, p. 24.

22) 9) に同じ。

- 23) ホンファーのデータによれば、1981年から1985年まで、1つの区で41人が被害に会い、総額100万バーツ以上が騙しとられているように、だまされて、出稼ぎに行けずコミッションを失ってしまう場合も多い。Hongfa, p. 124.

- 24) たとえば、丸岡洋司も、カノック・トースラットおよびブリチャー・ウィトラクーン、スマリー・ピタヤノン、ピーラテープらの資料を用いて東北タイの村落に海外出稼ぎがもたらした影響について、「村落の農村共同体的側面の危機」であると論じている。

「タイ国における海外出稼ぎ労働者送り出しの態様と農村におけるその影響—いわゆる外国人労働者問題の重要な一側面—」『国際経営フォーラム』No 2、神奈川大学国際経営研究所、1991年。

第3章 出稼ぎ労働の実態

1984年の調査では、パンドン村における農民の出稼ぎを中心とした離村についての一般的な傾向を出稼ぎ経験者へのインタビューを通して把握し、また1989年の調査では、1984年の調査のフォローアップを行った後、海外への出稼ぎ者の非常に多い第2区について集中的に調査を行った。¹⁾ その結果、パンドン村は、地理的、社会経済的に以下の4グループに分類することができ、この分類は、中東への出稼ぎや離村の問題を考えるにあたって非常に重要であるこ

とが明らかとなった。

(1) グループ1：5区、15区、16区：パンドン村の中心部にあり、豊かな地区である。富農が多く居住し、また雑業者層も多く居住する。

5区は、パンドン村の中心部である15区に隣接しており、地区全体としてはかなり豊かな地区といえるが、貧富の差は、非常に大きくなっている。農民は約30%にすぎず、残りは店を持ったり市場で働くなど、第3次部門に関わる雑業者層となっている。これらの雑業者層は、かつては土地を持たない貧困な層によって構成されていたが、1960年代以降の商品経済の活発化によって、現在ではかなり豊かな者も多くなった。もちろん、農地を喪失したり、相続できなかったりして、新たに雑業者層に転落した極貧層も存在する。これに対して、5区の農民は70%が土地なし層で、稲作・さとうきびの農業労働や村内雑業を行っている。5区および15区には、富農が多く居住し、大邸宅を構えている。富農層は、数百ライから数千ライの農地を所有しており、田は小作に出し、さとうきび畑は農業労働者を日雇いの形で1984年には25-30パーツ程度で、1989年には50-60パーツで雇用している。

富農層および雑業者層として成功した人々は、中東ヘミドルマン（現地雇用者とタイ人労働者の間を調整したり、現場監督などを行なうマネージャー的な仕事）として行ったり、出稼ぎの斡旋をしたりして高い収入をあげる人が少なくない。バンコクへの出稼ぎは皆無であるが、一方で子女は高い教育を受けるためにバンコクやコーンケンなどの都市に離村している場合が多く、バンコクやコーンケンでよい職業に付けなかった場合には帰村してくるケースが多い。その場合でも、公務員や教師など農村において安定した職業や商店の経営、様々な商品の取引などに従事している。

5区においては、バンコクへの出稼ぎは、1984年当時は全体の約10%、農民の約30%ほどが行っていた。1989年になると、ウドンタニ市やコーンケン、

クンパワピー内でのさまざまな農村での雑業につく場合が増え、バンコクへの出稼ぎは減少している。全体としては土地を多少もっているが、それだけでは家計が十分まかなえない層が、最も出稼ぎ傾向が強い。そして、中東への出稼ぎは大工・建築労働者などの技術のある雑業者層に多くなっているのである。若い子女の間では、一時的な出稼ぎではなく離村してしまう者が多いが、最近では仕事に行っても長続きせず、戻ってくる者が多くなっている。(15区、16区も、5区の状況とほぼ同様である。)

15区に住む33才の男性は、1984年現在、サウジアラビアにミドルマンとして出稼ぎ中である。彼は2000ライを超えるさとうきび畑をもつ大規模な農家の長女と結婚(婿入り)し、義兄らとさとうきび畑の運営にあっていたが、出稼ぎを斡旋する会社の誘いもあって2年間の予定で出稼ぎに就くことになった。これまでもさとうきびの栽培では多くの農業労働者を雇用し、監督しており、その経験が今の仕事に就く直接の契機となっている。収入は月3万バーツ以上にはなるとのことで、帰国後は新車の購入や自分の両親のための家の建築が予定されている。

15区に住む42歳の男性は、1984年現在リビアに電機技師として出稼ぎ中で、インタビューの際は、1ヶ月間の休暇で帰国中であつた。リビアへの出稼ぎはすでに3年を経過し、次のリビア行きで4年目になる。彼は、7年間の初等教育をクンパワピーで受けた後、バンコクで15年間電気工として働き、バンコクで店を持つまでになった。バンコクでチェンマイ出身の女性と結婚し、14年前にクンパワピーに戻ってきた。クンパワピーでも電気修理の店を持ち、生活は比較的安定していたが、クンパワピーでより程度の高い生活を求め、高い収入の得られるリビアに出稼ぎに行くことになったのである。彼のリビアでの収入は、技術者であるため月収1万8千バーツ、年収20万バーツにも達する。帰国中の彼の家をかいまみると、周囲の家と比べると非常に豊かである。新しいオートバイ、テレビ、ステレオをはじめ、サイドボードには高級酒が並び、妻が身

に付けている装飾品もかなりのものである。そして、家を新築する予定もあるそうである。また、彼には親から相続した25ライの農地があるが、弟に貸しており、自分では耕作をしていない。（一部は、コミッションを支払う際に抵当に入れたが、すでに返済している。）

(2) グループ2：4区：パンドーン村の交通の中心地に位置し、比較的豊かな雑業者層と貧困な雑業者層が混在する。農民は少ない。比較的豊かな雑業者層は、中東への出稼ぎを盛んに行なうが、スラム地区の貧困な雑業者層は、若い人を中心にバンコクや東北タイの主要都市に向かって離村する人が多い。

(3) グループ3：1区、2区、7区、8区、9区、11区、13区：東部に位置し、グループを囲んでいる。典型的な農業（稲作）地域である。

1区、2区、7区はもともと1つの集落（ムーバーンパンドーン）で、パンドーン村の北東部に位置し、川や池が多い低湿地帯となっており、稲作を中心とした農業地帯になっている。90%は農民で、土地を持つ農民は60%、土地なしは40%である。土地所有面積は少なく、最高でも40ライであり、平均では12ライ程度になってしまう。15-20ライ程度あれば、出稼ぎ収入と合わせて、人並みの生活ができるということである。2区からは、世帯の20%ほどが出稼ぎ者を出しており、1984年当時はバンコクへは15%、中東へは5%とのことであったが、1989年の段階ではバンコクへの出稼ぎが減り、中東を中心とした外国への出稼ぎが、出稼ぎの中心となっている。ここでは、土地を多く所有する農家ほど、中東への出稼ぎを行なう傾向にある。そして土地なし層の子女ほど離村の意欲が強く、バンコクやウドンタニ市などに定着してしまうことが多い。（残りの5つの区も、ほぼ同様の状況であるが、海外への出稼ぎは1区、2区、7区に比べて少ない。）

2区に住む52歳の男性は、1983年まで4年間サウジアラビアへ出稼ぎに行っ

た経験をもっている。出稼ぎ以前は、自分名義の農地を保有していないため、建築労働者としてクンパワピー郡で働いていた。バンコク生まれであるが、18年前にバンコクに働きに来ていたクンパワピーの女性と結婚し、当地に流入してきた。この女性の両親の土地は、まだ相続しておらず、最も忙しい時期に手伝う程度である。6人の子供があり、生活はかなり苦しかったが、バンコクに住むより自由でのどかであったと述べている。5年前にチャンスがあり、借金をしてコミッションを用意し、サウジアラビアへ大工として出稼ぎに行くことができた。そして、サウジでは年収約10万バーツを得ることができた。昨年は家を新築し、また様々な電機製品を購入している。

現在のところ、彼は仕事をもっていない。出稼ぎの収入で食いつないでいるという状態である。サウジアラビアでの収入を考えると、クンパワピーの建築労働者の給料ではとても働く気になれないということである。しかし、52歳という年齢のため、中東への再度の出稼ぎはもちろん、バンコクへの出稼ぎも考えたくないという。彼の希望は、自宅で商売をすることであるが、周囲にはすでに数軒の店があり、飽和状態となっている。現在、彼の世帯で行っていることは、彼の妻による小規模なガソリンの販売および数頭の豚の飼育のみである。これでは、とても家族を養うだけの収入は得られず、今後の生活設計には問題が多い。

ここで、パンドン村第2区で行なった50世帯（1989年の世帯数130から無作為に抽出）における詳細な調査による知見をあげておこう。表-1に示すように、最初の出稼ぎ者は1974年に現われ、1982年から85年にピークとなり、1989年に再び増加している。図-3には出稼ぎ国、出発年による収入（月）をあげた。ほとんどが5千-1万バーツの範囲であるが1985年以降は明らかに減少気味である。しかし、それでも表-2に示した国内の出稼ぎや表-3に示した未婚の若者に多い離村よりはかなり有利であることは、表-4の海外出稼ぎ者のデータが明らかに示している。50世帯の過半数にあたる26世帯に海外への出稼

ぎ経験者が存在しているのである。

(4) グループ4：3区、6区、10区、14区：西部に位置する丘陵地域であり、農業に依存するが、水利、地味の悪さのため極めて貧困である。

10区は、パンドン村の最西端に位置し、中央部の四区から約10キロの遠隔地にある。やや高台にあって農業に不向きな上に、土地なし農民が約7割もあり、パンドン村の中ではもっとも貧困な地区となっている。農地は720ライ（田-170ライ、さとうきび-550ライ）あるが、高台のため生産性は低く、さとうきび畑の中で条件の良い300ライは村外地主の農園となっており、10区の土地なし農民を雇用している。平均の土地所有面積は約30ライであるが、土地なし農民を含めると10ライを割ってしまう。

この地区の貧困さは、一步足を踏み入れただけで、他の地区より明らかに劣悪な居住環境によって理解できる。耐久消費財の所有も少なく、例えばテレビの所有は41世帯中わずかに1世帯であり、人気のテレビ番組の放映中には数十人が集まるという光景が見られる。また、市場からも離れている上に、一軒しかない地区内の店にも品物は少なく、食料は地区内で融通するが多い。子女の教育についても、義務教育である小学校の就学率が80%程度であり、中学校への進学率は数%にすぎない。

このような極めて貧困な地区でありながら、収入を増加させるために出稼ぎに行く人は非常に少ない。1983年11月から1984年5月にかけての農閑期にバンコクへ行った人はわずかに2人であり、中東へ出稼ぎに至っては、これまでにわずか1人である。中東へ出稼ぎがこれほど少ない理由は、年収2,500-5,000バーツ程の低い農業収入ではコミッションが捻出できない上に、10区の土地では抵当としての価値が無く借金もできず、また教育が低く能力の点でも疑問があるためリクルーターからも敬遠されていることによる。

6区は、4区と10区の中間に位置し、貧困の程度は10区ほどではない。10区

においては100%が農業に従事していたが、6区では30%程度の人々は種々の雑業に従事している。10区に比べると、出稼ぎ者は中東、バンコクともに多くなっている。そして、中東へ出稼ぎ者は雑業者層に多く、バンコクへ出稼ぎ者は農民に多くなっている。土地所有の状況は、50%ほどが土地なしであり、地主は15区に居住している。農民の中で出稼ぎに行く人々は、土地を所有している層に多く、土地なし層からはほとんどいない。

6区に住む中年の男性は、17ライの田をもつ農民である。やや高台にあって生産性が低いため、稲作収入だけでは不十分であるため、農閑期には毎年のようにバンコクへ出稼ぎに行っている。仕事はトラックの運転手で、月収は1,500-2,000バーツ程度である。パンドン村の方が住みやすいため、離村してバンコクに定着してしまうつもりは全くない。バンコクでの仕事は、肉体的・精神的にとってもハードなものであるにもかかわらず、賃金は満足できるものではない。そこで、何とかして中東へ出稼ぎの機会を待っているのである。

以上のようにパンドン村は4つのグループに分類でき、その区の置かれた社会・経済的および地理的条件によって出稼ぎの状況が大きく規定されている。結論としては、出稼ぎには階層性があり、出稼ぎはまず富裕層のいる地区から、そしてその中でも富裕層から始まるのである。したがって、地理的条件に恵まれ、富裕層の多い地域からの出稼ぎ者が多く、条件の恵まれない貧困層の多い地域からは出稼ぎ者が少ない。とりわけコミッションの高額な海外への出稼ぎはその傾向が顕著である。また、その地域の中での社会・経済的な地位も、出稼ぎの状況を規定する大きな要因となっており、地区の富裕層からそれぞれの出稼ぎ者が始める。

ここではインタビュー調査をもとに、上層、中の上、中の下、下層のような4つの階層を設定し、離村の形態との関係を論じてみよう。上層とは、100ライ以上の土地を所有するような富農層、下層とは、土地なし層である。中層は、

中東へ出稼ぎのためのコミッションが支払い可能かどうかで中の上と中の下に分類した。中の上と中の下に分岐点は、ほぼ土地所有面積25ライである。出稼ぎ型の離村は、階層によって明らかに規定されている。上層においては、ごく一部がミドルマンとして中東へ行き、中層においては、コミッションが支払える層が中東へ、支払えない層はバンコクへ出稼ぎとなっている。そして、下層の出稼ぎは少なくなっている。これが1984年および1989年の調査で得られた知見である。

ここにあげた事例では、15区に住む33才の男性は上層でミドルマンとして中東に行った事例であり、15区に住む42才の男性および2区に住む52才の男性が中層においてコミッションが支払える層の例で、パンドン村で階層が上である15区に住む42才の男性の方が中東へ出稼ぎ先で好条件に恵まれている。また、6区に住む中年の男性がバンコクへ出稼ぎに出る層（中層でコミッションの支払えない層）の事例である。

このように、出稼ぎは明らかに階層性があり、その結果もたらされた収入は人々の欲望をかきたて、また不平等をさらに拡大させることになる。したがって、出稼ぎ者の分析は村内の社会構造や社会変動の分析の大きな手がかりとなっているのである。

一方、出稼ぎや離村の傾向が次第に変化してきたこともこの調査から明らかになった。出稼ぎの行き先としては、1970年代にはバンコクへが中心であったが、1980年代には中東が中心となり、1990年代に入ると日本を中心としたアジア諸国がその中心となってきた。日本へ出稼ぎは、収入が莫大である反面、未登録（いわゆる不法）就労となるため様々な問題を引き起こしているが、第2区からは区長（プーヤイバーン）の息子が行くなど、コミッションの高さから中東へ出稼ぎ者よりもさらに上の層が日本へ向かうようになった。²¹ 合法的に出稼ぎに出られる台湾やホンコンの人気も高い。これに対して、国内の出稼ぎは減少して海外出稼ぎを補完する程度になり、また離村も数こそ多いもの

の、ほとんどが未婚の若者に限られるようになったのである。⁹⁾

出稼ぎに依存することへの問題点を、第2区の調査から論じてみよう。まず最も目につくことは、出稼ぎがもたらした大金によって、人々は何の疑いもなく浪費をするようになってしまったことである。

結婚式や葬式、また年に5回の祭りはもともとイサーンの人々にとっては重要で、それにかける金が多いことが批判されていたが、出稼ぎの開始後はさらに贅沢なものとなってきた。酒の種類も高いものとなり、ここではかなり高価なビールやブランデーもふんだんに出されるようになった。また、パーパーなどの寄付を募る行事や寺への布施でも、それまでは10バーツ単位であったのが、出稼ぎ開始後は100バーツ単位のものが増えてきた。

農村の娯楽であるギャンブルにかかる費用も出稼ぎの開始後はうなぎ登りに上昇した。週末にテレビ中継されるムエタイ（キックボクシング）や、祭りなどの節目節目の際に行われる闘鶏では、これまでは10バーツ単位で賭けを楽しんでいたが、特に外国に行って金のある人の場合、その賭金はケタ外れなものとなった。普段の賭事でも100バーツ単位でそして雨乞いのための祭りとして毎年六月に行われるロケット祭りには、1,000バーツ、1万バーツ単位で賭けが行われる場合もある。

次に、すでに論じたように人々は次第に農業に関心を示さなくなり、農業に基づいた地域文化が崩壊に瀕していることである。

まず、最初に生じたのが、共同労働である「結」の賃労化である。1970年頃までは、ほぼ自給自足の状態であり、すべての農家が共同労働に参加していた。ひとつは、水利に関わる共同労働、もうひとつは田植え、稲刈りの際の「結」の形での共同労働であるが、20年ほど前より田植え、稲刈りの際の共同労働には金銭が支払われるようになり、中東への出稼ぎ者が増加したあとは、農業労働者も雇用するようになった。調査対象の50世帯においても、田植えや稲刈りの際の「結」に32世帯が行き、24世帯が来てもらおうと答えているが、その際に

はごく近い親戚の場合を除き、すべて1日30パーツの金が支払われている。したがって、農業労働者を雇用するよりも安く、安価な労働力の供給システムとなっている。そして、不足する場合や、出稼ぎ者を出して「結」に加われない場合は、農業労働者を雇用するのである。

農業の中心的な担い手が出稼ぎに出た場合は、農業労働者を雇用する以外に、一時的に他人に耕作させ、収穫の60-70%を耕作者に払い、30-40%を土地の所有者が受け取るというケースが現われ、最近では増加している（東北タイにおいては、小作という慣習は一般的ではない）。また、耕作されていない場合もあるのである。

「結」に代表される農村の連帯の崩壊の原因には、出稼ぎの情報をめぐる農民同士の不信感とその一因となっている。多額のコミッションを払いながらだまされて目的国にいけない場合もあり、斡旋業者だけでなくその情報の発信源となった人にもその際には恨みをもつことが多いのである。⁴⁾

第2区の農業の衰退は、農業グループの崩壊という形でも現われている。このグループは、96人のメンバーで構成され、「結」などの共同労働の際に重要な役割を果たしてきただけでなく、養豚、魚の養殖、新しい品種の導入、肥料や殺虫剤の共同購入などにも関わっていた。また、農業協同組合銀行（トー・コー・ソー）から借金をするための組合の下部組織にもなっていた。しかし、結の崩壊とともに農業グループも崩壊し、1985年からは、農業協同組合銀行から借金をするためのグループとなってしまった。

また、主婦グループの役割も大きく変化した。かつては、「結」などの際に食事を共同でつくったりするなど農業との関わりが大きかったが、現在では祭りの際に共同で食事をつくり、寺へ献上することや、郡役場の指導で安全な食事の作り方を広めるなどの役割にとどまっているのである。

農業が衰退するとともに、農村の家内工業として重要であり伝統的文化でもあった藁や竹の細工も衰退していった。かつては乾期に多くの世帯で行われて

いたが、現在ではごくわずか、調査対象の50世帯ではわずか2世帯で行われているにすぎない。

相続の仕方にも、変化が生じている。たとえば、第2区の区長宅のように女、女、男、女、男の順に5人の子供がいる場合、三女が婿をとって家を継ぐのが慣例であったが、三女はすでにバンコクに出てしまい、バンコクで知合った男性と婚約中で、結婚後もバンコクに永住する予定であり、今のところ誰が継ぐかはまだ決まっていない。このような動きの中で、親族としての連帯が希薄になり、かつては親族同士の相互扶助が多かったが、このような慣例はうすれ、村内の親族でつき合う親族とつき合わない親族とに分かれ、金のある親族に人が集まる傾向にある。

さらに、宗教の面でも、出家者の減少が見られ、特に農村において成人式のような意味を持っていた若者の出家が大幅に減少し、成人式としての意味はすでに持たなくなった。また、寺での行事もほとんど形骸化した。ロケット祭りやローイ・クラトンも、農業との関わりという本来の意味を失ってしまったのである。

以上、出稼ぎ労働の実態とその影響について論じてきたが、中東から日本へ行き先がシフトするにつれて、階層性という特徴、もたらされた大金による人々の浪費と農業への無関心はさらに明確なものとなり、深刻な問題となりはじめた。必要以上の「モノ」「カネ」への執着、欲望がこのような事態をもたらしたということが言えるが、果たしてこのことが農村の発展を意味するのか、改めて問い直す必要があるのである。

注)

- 1) バンドーン村第2区の調査の詳細については、鈴木規之『第三世界におけるもうひとつの発展理論：タイ農村の危機と再生の可能性』国際書院、1993年、第3章を参照のこと。
- 2) 日本への出稼ぎの事例については、駒井洋、鈴木規之「出稼ぎ労働者たち—日本の

なかのタイ人― 小野澤正喜編『アジア読本 タイ』河出書房新社、1994年を参照のこと。ここでは、一般書のためノンカム村という仮名を使っているが、パンドン村の事例である。

- 3) このような状況の背景には、村内周辺での様々な雑業（バイク・タクシーなど）やラブチャーン（日雇い労働）の機会が増加したことがある。
- 4) 出稼ぎの失敗については、鈴木規之「欲望の循環―出稼ぎ労働者―」小野澤正喜編『アジア読本 タイ』河出書房新社、1994年を参照のこと。

おわりに

1994年8月に法務省入国管理局が発表した1994年5月1日現在の未登録残留者の数は、不況の影響もあり、293,800人で、最高を記録した1993年5月1日現在の298,646人に比べて4,846人(1.6%)減少した。その中で、タイ人は49,992で6ヶ月前に比べ7.2%減少しているものの国籍別では依然として第1位である。このうち、売買春や人身売買、エイズなどの問題でよく取り上げられる女性は27,381人で、タイ人未登録残留者全体の54.8%と半数以上を占めているが、半数近い男性出稼ぎ労働者もかなりの数にのぼっている。女性の占める割合は、エイズ問題やタイ政府の渡航自粛キャンペーンなどにより2年前より0.4%減少したが、男性労働者の数は、この不況下でも減少する傾向を示していない。このことは、外国人労働者全体の示す傾向（1993年11月に比べて男性が3.3%減少、女性が2.8%増加）とは異なった傾向を示している。これは、タイ人労働者が外国人労働者のヒエラルヒー（いわゆる性産業を除く）のなかで、漢字を理解する中国人、韓国人、マレーシア人（中国系が多い）に続く地位にあり、イラン人、バングラディッシュ人、パキスタン人より就労機会に恵まれているためである。したがって、東北タイの人々にとって、日本は依然として出稼ぎ先として最も魅力のある場所であり、ビザの取得の困難さや未登録就労という形であっても彼らの日本への出稼ぎ指向は今後も続くと思われる。

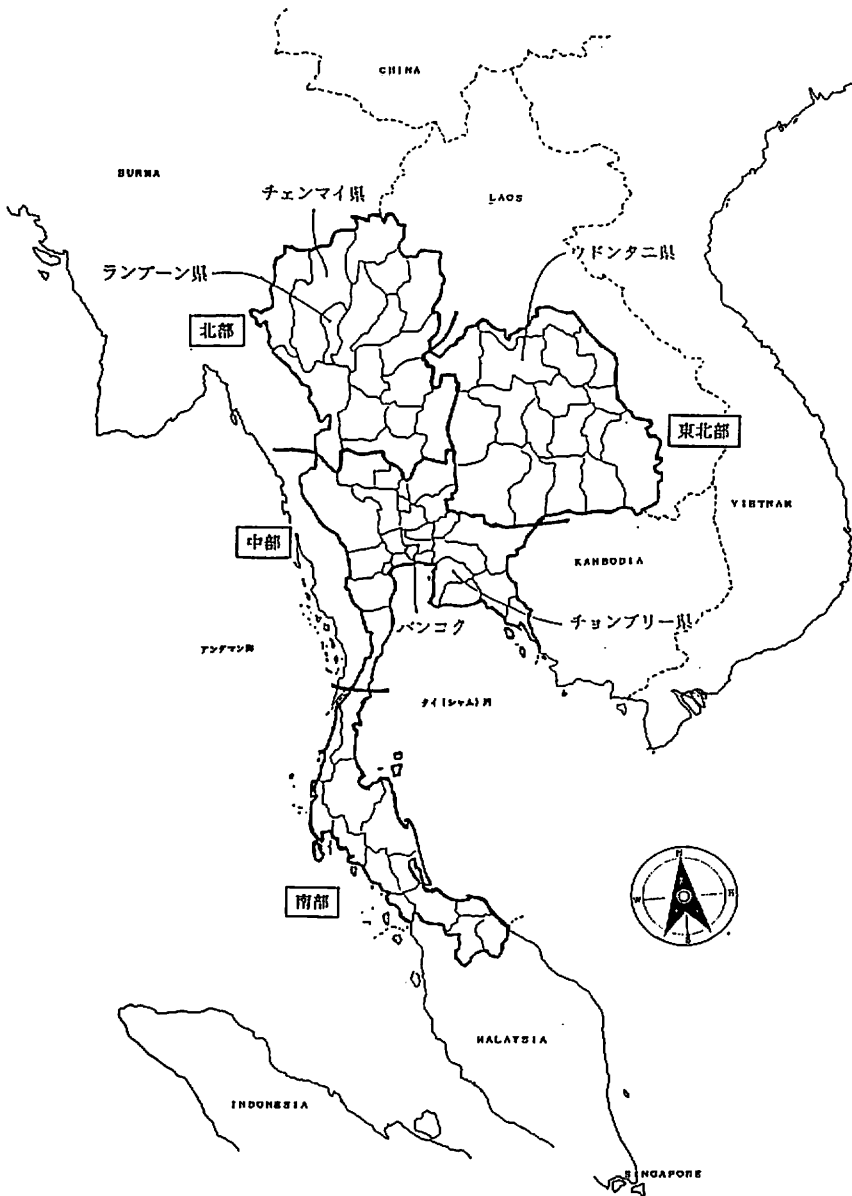
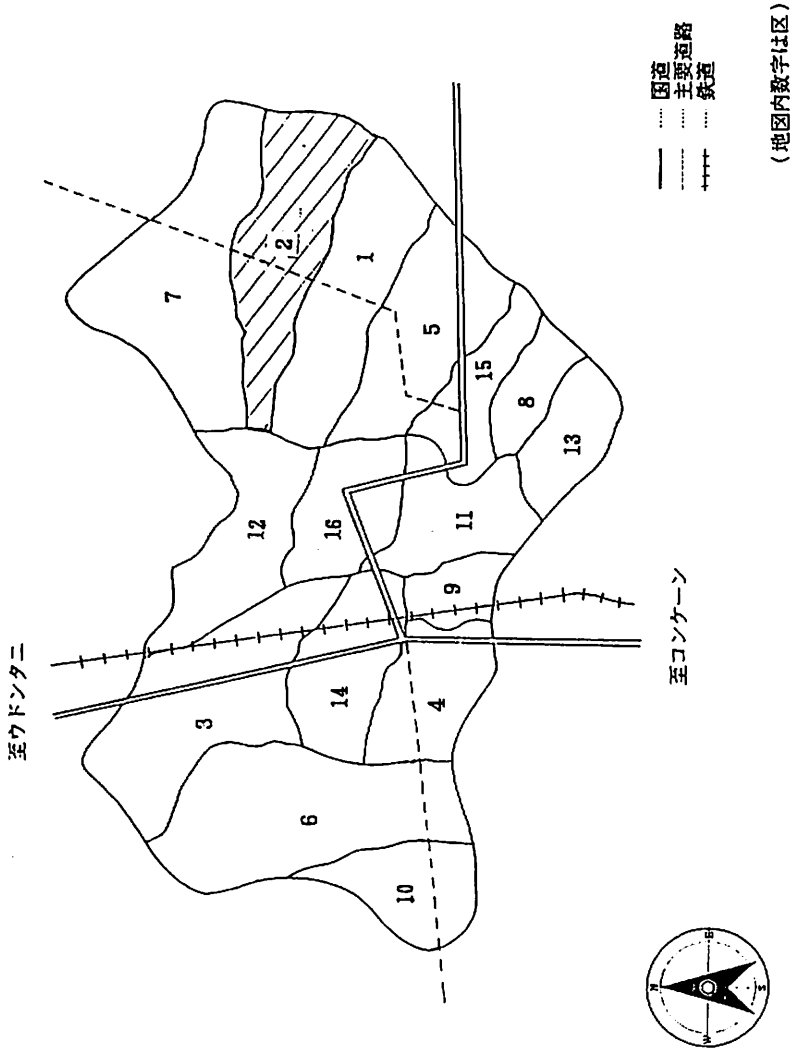


図-1 タイ全図



図一2 バンドン村略図

表-1 パンドーン村第2区からの海外出稼ぎの動向

1974	サ									1
75										
76										
77	サ									1
78	サ									1
79	サ	サ	サ							3
80	サ	サ	イ	イ						4
81	サ	サ	イ	シ						4
82	サ	サ	サ	サ	シ	イ				6
83	サ	サ	サ	サ	シ	イ				6
84	サ	サ	サ	リ	シ					5
85	サ	サ	サ	サ	サ	ヨ	バ			7
86	サ	ヨ	バ							3
87	サ	サ	バ							3
88	サ	バ	バ							3
89	サ	サ	サ	サ	サ	リ	リ	リ	バ	10

(サ-サウジアラビア、イ-イラク、バーバーレーン、リ-リビア、シ-シンガポール、ヨ-ヨルダン)

図-3 海外への出稼ぎ者の出稼ぎ国、収入、出発年

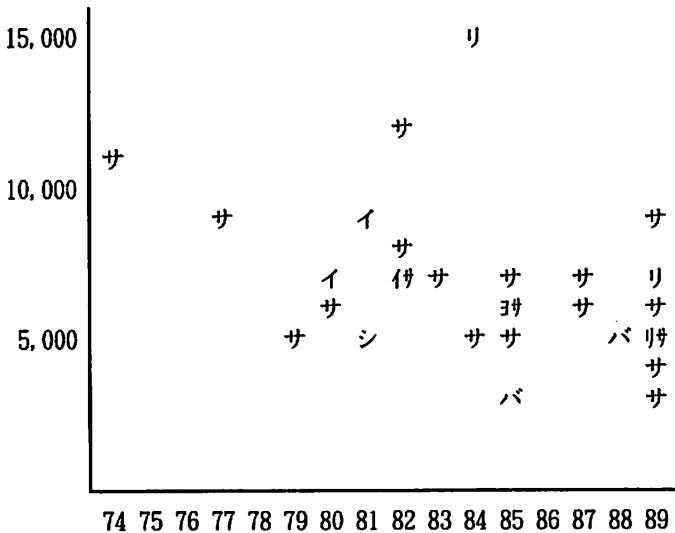


表-2 国内の出稼ぎの状況

性齢	年	場所	職種	収入/月(バーツ)
305 男 4 0	1977	バンコク	大工・左官工	
女 4 4	1977	バンコク	建築労働	
314 男 4 4	1969	バンコク	港湾労働	2 5 0 0
	-1982			(1 9 8 2年)
318 男 4 6	1974	バンコク	建築労働	1 5 0 0
	-1984			- 2 5 0 0
319 男 2 9	不明	バンコク	建築労働	(3ヶ月)
324 男 5 5	1987	バンコク	大工	
	1989			
325 男 6 3	1984	ノンタブリー	建築労働	
男 1 9	1989	バンコク	建築労働	8 0 0 (15日)
333 男 3 9	1989	バンコク	建築労働	2500-3000(乾期の3ヶ月)
342 男 5 7	1989	ラヨン、バンコク	建築労働	1200(年に15000)
		コーンケーン、ウボンラーチャタニー、ノンカーイ		
344 男 5 0	1982	コーンケーン	精米所	1800(精米のサイズに)
	-1988			
346 女 3 0	不明	ソクラー	お手伝い	6 0 0
348 男 4 2	1984	ナコンシータマラート	大工	
	1985	バンコク	大工	
352 女 3 0	1984	ウドンタニ	美容師	

(1バーツは1989年でほぼ5円であった。)

表-3 未婚の若者の離村の状況

性齢	離村年	場所	職種	収入/月(パーツ)
305 女 2 1	1985	バンコク	事務員	4 0 0 0
318 女 1 8	1989	バンコク	デパート売り子	2 0 0 0
女 1 6	1989	サムットプラカーン	ワニ園案内	7 0 0
319 男 2 7	1988	バンコク	工場労働	3 5 0 0
331 男 2 2	1988	バンコク	工場労働	2 6 0 0
女 2 1	1989	バンコク	工場労働	2 5 0 0
335 男 2 7	不明	バンコク	求職中	-
女 2 6	不明	ウドンタニ	事務員	1 5 0 0 - 2 0 0 0
女 2 4	不明	ウドンタニ	事務員	2 5 0 0
女 2 4	不明	コーンケーン	事務員	1 5 0 0
男 2 3	不明	プーケット	不明	3 0 0 0
341 女 1 8	1989	バンコク	お手伝い	5 0 0 - 6 0 0
344 男 2 2	1985	バンコク	トラック助手	3 0 0 0
男 1 7	1989	ノンカーイ	建築労働	1 5 0 0
345 女 1 5	1989	バンコク	お手伝い	7 0 0
346 女 1 7	1989	バンコク	お手伝い	8 0 0
女 1 6	1989	サムットプラカーン	お手伝い	7 0 0 - 8 0 0
348 女 2 0	1989	バンコク	縫製工	2 0 0 0
349 男 1 4	1989	ノンカーイ	建築労働	9 0 0

表-4 海外への出稼ぎ者のデータ

世帯番号 (性別はすべて男)	年令(出稼ぎ時)	行先	期間	出稼ぎの期間	月収(送金額) (パーツ)	仕事の内容	モーションの額 (判明した もののみ)
301	30(30)	サウジ	1年	1989-90	4,000	労働者	
303	32(23) (25)	サウジ	2年	1980-82	6,000	建築労働	
		サウジ	2年	1982-84	12,000	建築労働	
305	40(31) (33)	イラク	1年	1980-81	7,000	左官工	
		サウジ	1年	1982-83	7,000	左官工	
306	37(37)	リビア	1年	1989-90	未	運転手	45,000
307	24(24)	リビア	1年	1989-90	5,000	労働者	
312	31(23)	シンガポール	4年	1981-85	5,000	労働者	
319	29(23)	サウジ	2年	1983-85	不明	労働者	
320	22(22) 21(21)	サウジ	1年	1989-90	5,000	労働者	26,000
		サウジ	1年	1989-90	3,000	労働者	20,000
324	30(23) 25(25)	イラク	2年	1982-84	7,000	労働者	
		リビア	1年	1989-90	7,000	労働者	64,000
328	30(30)	サウジ	1年	1989-90	8,000-10,000	縫製工	
329	45(40) (44)	リビア	1年	1984-85	15,000	労働者	
		バーレーン	1年	1988-89	5,000	労働者	
330	36(32) (34)	サウジ	2年	1985-87	6,000	労働者	
		サウジ	2年	1987-89	6,000	労働者	
332	26(22)	サウジ	1年	1985-86	不明	労働者	
333	39(35)	ヨルダン	2年	1985-87	6,000	建設労働	30,000
335	52(48)	サウジ	1年	1985-86	7,000	左官工	
336	45(35)	サウジ	1年	1979-80	5,000	左官工	3-40,000
337	38(33)	サウジ	1年	1984	5,000	運転手	40,000
338	38(32)	サウジ	3年	1983-86	6,000-7,000	建築労働	
339	34(34) (48)	サウジ	1年	1989-90	未	塗装工	28,000
		イラク	1年	1980-81	不明	建設労働	
343	37(37)	サウジ	1年	1989-90	5,000(未)-6,000	タイル工	
346	40(38)	サウジ	1年	1987-88	7,000	電気修理工	
347	41(26) (37)	サウジ	1年	1974-75	11,000	運転手	
		バーレーン	5年	1985-90	3,000	運転手	
350	38(30) (31)	イラク	1年	1981-82	9,000	塗装工	
		サウジ	1年	1982-83	7,000-9,000	塗装工	
351	40(28)	サウジ	7年	1977-84	9,000	塗装工	
352	31(27)	サウジ	1年	1985-86	4,000-5,000	建築労働	